



# 土人形



川崎ゆきお

最近部屋に籠もりがちな友人を木下は訪ねた。まだこんなボロアパートが残っているのかと思うような、その二階の部屋だ。友達訪問よりも、そのアパートへ行きたかったのかもしれない。

「定食屋で見かけないけど」

「ああ、最近自炊してるんだ」

「それで、見かけないのか。なるほど」

部屋はきっちりと整理され、掃除も行き届いている。

「籠もりがちかな？」

「ああ、そうかなあ」

「よく道で出合ってたのに、最近見ないから」

「そうだなあ、あまり外に出ていないなあ」

「今、何してるの」

「今かい。うーん、それが問題なんだ。やることがない」

「ああ」

「それで、何もしないで、じっと座ってる」

その椅子の横にタワー型のパソコンがある。古いパソコンだが、自分で組み立てた。そのときは大いに盛り上がり、木下にもその話を熱く語っていた。

「何もしないで、じっと座ってるのが、一番の苦痛だよ。それで、何でもいから、何かをやろうとするんだけど、なかなか熱中出来ないんだ」

「なるほど」

「それでまあ、自炊とかやっていると、それなりに用事が出来るから、いいんだ。やる事が発生する」

「何か色々やることがあったような気がするけど」

「あったけど、旬を過ぎた」

「そうか」

テーブルの上に、妙な人形がある。

「何、それ？」

「神様だ」

土偶のような形をしている。

「じっとこれを見ていると、落ち着くんだけど、妙な世界に行ってしまうようになる」

「それはどうしたの？」

「骨董市で買った」

「神様が売られていたんだ」

「仏様だって売られているよ」

「ああ、そうか。でも、この土人形、神様かどうかどうして分かるの」

「僕が、そう思ったので、神様にした」

「それは、やることがないから、そんなことをするんだよ」

「分かってるけど、ネタが欲しいんだ」

「プラモデルでも組み立てたら」

「作り物は飽きた。気分が乗らないんだな。その気にならないと、あれは出来ない」

「じゃ、今はこの土人形がいいのかな」

「よくないよ。内へ内へと入ってしまうから」

「うんうん」

「何かやることを見つければいいのにねえ」

「そのうち飽きてきて、動き出すよ」

「え、神様の人形が」

「怖いことを。神様じゃなく、僕がだよ」

「あ、そうか」

木下も、そんな土人形が欲しくなった。

了